

# 成果報告書

記入日 2016年 4月 15日

氏名 西島 薫	渡航先国名 インドネシア	所属機関 インドネシア科学技術院
研究テーマ：西カリマンタン州・クタパン県における地方政治の人類学的研究		
研究期間： 2014年 9月 ～ 2015年 3月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>西カリマンタン州・クタパン県の2つの王権に関して、1900年頃から現在の地方分権化にいたるまでの時代変遷と王権の変容についての史料・伝承を収集することができた。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p><b>1. 研究の背景と目的</b></p> <p>1998年の中央集権的なスハルト体制が崩壊した後、急速な勢いで地方分権化がすすめられた。ネオ・リベラリズムの思想的背景の下、民主化や市場開放を促進する目的ですすめられた地方分権化は様々な問題を引き起こした。地方分権化以後の研究は、「新県分離」「寡頭制のローカル化」など様々な切り口から研究がおこなわれた。しかし、地方王権の復興に関しては十分に焦点が当てられてこなかった。調査地であるクタパン県には、1つの河川の上流と下流に2つの「兄弟」関係にあるとされる王権が存在する。年長の王にあたるウル・アイ王は、神器の神聖性によって王であると認められる「神聖王 raja keramat」である。また、神器の神聖性を認める領域は、デサ・スンビラン・ドモン・スプルと呼ばれる。年少にあたるマタン王国は、オランダ植民地政府の間接統治体制の下で、「自治領の首長」の地位を与えられた地方王権であり、「神聖王」に対して「権威の王 raja daulat」とも言われる。地方分権化以降の両王権の復興の過程、影響および背景を考察するにあたって、①王権の復興プロセス②現在の王権を支える儀礼実践③歴史研究、特に20世紀からの歴史研究、の3点に焦点を当てて以下、成果報告をおこなう。</p> <p><b>2. インドネシア・西カリマンタン州・クタパン県での調査</b></p> <p><b>① 王権の復興過程</b></p> <p>ウル・アイ王が台頭する契機になったクタパン市内での大規模儀礼は、カトリック教会の司教が仕掛けたものである。改革前後の混乱を好機と見た司教は、オランダ植民地時代から、ムラユ系の人々に抑圧されていたダヤック系の人々のプレゼンスを示すとともに、ダヤック人の「神聖性」を取り戻すためにウル・アイ王を担ぎ出し、儀礼をおこなったという。2001年にも同様に大規模儀礼がおこなわれる。2001年の儀礼は、スハルト体制崩壊後に頻発する民族紛争が、クタパン県に及ばないようにするための9民族の和平を目的としていた。しかし、背景には、ダヤック系と華僑という非イスラームを統合しムラユ優位の状況を打開する目的があった。また、分権化以後は地方政府が森林開発権を積極的に発行する一方で、慣習</p>		

権が大幅に認められるようになったことで、全国的に企業側と住民の間の対立が鮮明化する。98年には、クリオ地域で木材企業に対する大規模なデモが起こる。この時に、幹部に事態収束を要請されたウル・アイ王は、デサ・スンビラン・ドモン・スプルの名の下に、デモへ参加した住民へ儀礼的制裁を課す。さらに、2011年には地元名士とともにウル・アイ王たちの知らない間に開発許可を取って操業していたアブラヤシプランテーション企業に対し州都の森林局前で儀礼的制裁を課す。これらの事件を通じて、ウル・アイ王の活動の範囲が広がっていく。同時に、選挙前になるとダヤック人候補が続々とウル・アイ王の伝統家屋を訪れて、神器に対して加護を乞うなど、地方エリートとのネットワークも構築している。他方で、スハルト体制崩壊直後、マタン王国の末裔の間では、末裔による団体を結成しようという機運があった。末裔たちは、政府との折衝役として最後のマタン王国宰相の息子であるクンダワンガン群長に依頼する。計画段階から、モルケス元県知事の働きかけがあった。2001年に王宮で大集会がおこなわれ、組織の立ち上げがおこなわれる。モルケスは演説の中で、「唯一で支配的」であった時代は終わり、「モチベーターとファシリテーター」としての役割が重要になる旨を述べる。モルケスは、文化政策の中心としてマタン王国関連遺跡の復興を促進させる。他方、末裔たちはキアイ・マンク・ヌグリという称号をモルケスに与えると同時に王国を代表する権限を与える。この権限を利用し、モルケスはまた各地の王族の集会などに参加しつつ「王」であるかのように振る舞っていく。また、モルケスの寡頭体制の下で新たなエリートも誕生する。後に、宰相として戴冠する KG は改革前夜に西カリマンタン州の名門タンジュンプラ大学へ進学していた。卒業後は、企業へ勤め子会社の社長にまで上り詰める。その後、西カリマンタンへと帰ってきた後に、モルケスから官製企業であるクタパン・マンディリの社長に抜擢される。その後も、モルケスの配下の文化団体の重役などに登用される。さらには、ゴルカル党から選挙へ出馬し当選すると、県議会議長へと就任する。KG は、モルケスの構築した寡頭制の下で、地方エリートへの階梯を上っていった。2008年には、戴冠される時には傍系でありつつも3人の宰相の1人に選ばれ、末裔を率いる長へとなっていた。2008年から現在に至るまで、マタン王国の復興は、KG 主導の下でおこなわれていく。

## ② 権威を支える儀礼と信仰

ウル・アイ王は「神聖王」であり、その神聖性の及ぶ範囲はデサ・スンビラン・ドモン・スプルと呼ばれる。王の神聖性は、王の継承する神器の神聖性から派生する。真淵[1974:51]は神器信戴共同体について「共同体結合の象徴として神器およびそれをめぐる儀礼によって特徴付けられている。神器は、槍、旗、霊石などであって、その神秘的力が人間および作物の豊穡を確保するものと信ぜられている」としている。しかし、神器奉戴共同体がどのような性格の共同体であるのかは明確ではない。本調査では、神器奉戴共同体としてのデサ・スンビラン・ドモン・スプルの性格及び地方分権化以降にどのような変革を遂げているかを明らかにする目的とした。ウル・アイ王は、年に5回の農耕儀礼をおこなう。他方で、SK 集落でも、村人たちは農耕サイクルに合わせて儀礼をとりおこなう。重要な点は、両者の儀礼が相互に独立したサイクルでおこなわれるということである。起源神話との関わりのある収穫儀礼においてもウル・アイ王は参加することも言及もされることもない。他方で、ウル・アイ王の大規模儀礼も、集落の農耕儀礼のサイクルとは無関係なのである。儀礼的にはウル・アイ王は集落と乖離した存在であると言える。他方で、遠方の集落には「神器の柱」と呼ばれる旗柱がある。先々代のウル・アイ王の頃から建て始めたものであり、現在では SK 集落を中心に南北 100km の範囲に 12 本の柱が存在する。半数以上は、改革前後にウル・アイ王によって建てられたものである。多くの場合、民族紛争が神器の柱建設の契機となっ

ている。神器の柱が存在する集落では、毎年神器に加護を乞うための儀礼がとりおこなわれるようになる。他方で、マタン王国の末裔の復興は集会と儀礼を通じておこなわれている。しかし、現在の末裔の間では、かつてどのような儀礼がおこなわれていたのか記憶している者はいない。改革後しばらくは、イスラーム暦に合わせて儀礼がおこなわれる他、ムラユ文化関連の行事も王宮でおこなわれるようになる。しかし、現在では不定期となっておりほぼ開催されない状況となっている。理由は、モルケス政権が終わり、ダヤック系県知事が就任したことで、地方政府の文化政策の重点が「ムラユ文化」から「ダヤック文化」へと移行したことである。しかし、年に1度、イクラマツの大集会が開催され、クタパン県内の各郡から末裔たちが王宮に集まる。マタン王国は神器などの多くが所在不明となっているが残された王宮という特別な「場」が末裔の紐帯を取り戻す重要な装置として機能している。

### ③ 歴史的経緯

なぜウル・アイ王の神器奉戴共同体の信仰が空洞化しているのか、マタン王宮文化の復興が進まないかなどは、歴史的経緯と密接な関係がある。ウル・アイ王に関するオランダ時代の記録は存在しない。現地の人々の話では、王宮に各地域の慣習長がマタン王宮に貢納運んでおり、王宮から帰ってきた慣習長を通じてウル・アイ王の伝承が伝わってきたのだと説明する。1946年の記録には、「ダヤック民族の神器を管理するウル・アライ王（ウル・アイ王の現地語読み）」が隣県の集落を訪問ことが記されている。この後から、ウル・アイ王が各地を訪問したことに関する伝承が多く聞かれるようになる。人々は、ウル・アイ王の足を洗った水を飲み、その水を畑へ蒔くほど、神聖な人物とされていた。先代の各集落への訪問は、97年頃まで続いていた。改革後に、ウル・アイ王がエリート化していき周辺集落との関係が希薄化する一方で、外縁地域のウル・アイ王や神器に対する信仰は、民族紛争を契機に「神器の柱」として実態化していくのである。オランダの影響力が及ぶ以前の、マタン王国の王族たちは交易者と在来民を結ぶ仲介者として影響力を持っていた [Ota 2010]。1845年にマタン王国の王であるグスティ・サブランが、オランダと「長期協定」を締結して以降、オランダの植民地下に入る。この協定によって、華僑からの徴税権の剥奪や奴隷貿易の禁止などの経済活動への制約が課される。その後も、マタン王は、間接統治体制の下で、自治領の首長としての権威を持つのみとなる。1942年に日本軍がボルネオに上陸すると、日本軍政に協力的な貴族たちもいたが、王を始めとして多くの貴族たちが虐殺される。この時に虐殺されたのは、多くの有力な貴族たちであると考えられる。日本降伏後、オランダが再度、再度植民地化を計画する。体制の転換期であり、王の座をめぐる対立があったものの最終的に、虐殺を逃れた3人の宰相によってマタン王国が率いられるようになる。1959年にインドネシア共和国に統合されると、宰相たちは特権的地位を失う。独立後も、一部の末裔たちは、郡長や村長などの地位に留まったものの、時代の経過とともに、権威や地位は失われていった。さらに中央集権体制期にかけて、地方政府の目を気にする末裔たちの間では、称号が相続されなくなっていった。また、貴族同士の内婚といった婚姻規範もほぼ効力を失い、貴族の末裔たちは一介の市民となっていく。地方分権化後には、民族政治の高まりとともに、ムラユ系県知事の下で、文化政策の中心に位置づけられるようになるものの、改革以前より地方エリートであった者が敷く寡頭体制の下、地方政治の状況に大きく左右されつつの復興となっている。

馬淵東一.1974. 『馬淵東一著作集 第二巻』社会思想社, A.Ota. 2010. Pirates or Entrepreneurs? Migration and Trade of Sea People in Southwest Kalimantan, c.

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### ① 調査地にはいるまでの経緯

調査地に入る前、調査地や調査対象は決まっていたものの、まったく知り合いのいない中どうやって、特定の調査村に入るのかと不安でいっぱいであった。ジャカルタでの手続きを終え西カリマンタン州都ポンティアナックに移動したところ、市内のホテルで文化セミナーをおこなっていることを聞きつけた。セミナー会場に飛び込みで参加したところ、調査予定地であったクタパン県の元県知事の息子を紹介してもらった。調査について話すと興味を持って頂き、同氏にパンリマとよばれるクタパン県の名士のところまで案内して頂いた。パンリマは、さっそくウル・アイ王に電話をし、日本人の学生が調査おこなうためにやってきたことを伝えたと、ウル・アイ王は受け入れを快諾してくれた。これらの人々には、調査の最後までこれらの人々には大変お世話になった。

### ② 西カリマンタン州・クタパン県での調査

留学期間は、西カリマンタン州クタパン県に存在する2つの王権に関して調査をおこなった。クタパン県の北東部からビハ川とクリオ川が流れており上流域で合流しパワン河となり海へ流れる。マタン王国は、パワン河の下流のデルタ地帯に存在する。他方で、ウル・アイ王はクリオ川に居住している。調査をおこなうにあたり、両方の村を頻繁に行きする必要がある。ボートで移動すれば2日ほどかかるため、陸路を利用することが多かった。しかし、雨季になると、赤土質の地面は滑りやすく、道のところどころでアブラヤシを運ぶトラックが立ち往生している。巨大な水たまりに片輪がはまり横転したトラックや、水没しエンジンがかからないため乗り捨てられたバイクを横目にみつつ、200kmの道のりを移動していたことは、忘れられない思い出である。

調査および調査地での数々の出会いは、松下幸之助国際スカラシップの助成がなければありえないことでした。心より厚くお礼申し上げます。

## 今後の社会貢献

現代インドネシア地方社会における「王権」の復興プロセスについて調査研究をおこなった。以下の観点から社会貢献をおこなっていく。

第1に、論文やの形で研究を外部に発信していくことである。特に、ウル・アイ王は、98年の登場後、学術雑誌に研究ノートが出るなど国外の研究者の間でも注目が集まった。特に英語論文にて、積極的に研究を国内外に向けて発信していく必要がある。

第2に、西カリマンタン州クタパン県の人々への情報や資料の提供である。ウル・アイ王やマタン王国に関しては現地の人々も関心を持っているものの、ジャカルタにある史料やオランダ語史料などに関してはアクセスが難しい状況にある。また、現地の人々が書いた自家本なども同様である。報告者も、ジャカルタで見つけた史料などを現地の人々に還元してきた。そこには、本人も知らない祖先の名前などが書かれている。今後は、現地の人々と連携しつつ、両王権に関する資料を誰でも自由にアクセスできるような環境をつくる必要がある。さらに、歴史には様々なバージョンがあり、地元の人々の手で書かれた文書をまとめた冊子などをつくるのが出来ればよいと考えている。



ウル・アイ王の儀礼



マタン王国王宮



現地の友人とポンティアナックを散策



滞在村の儀礼の様子